地理学専攻者がメンバーに多いためか自然人文にわたる地理的記述の多いのも特色であり、全体の構成は各町村ごとに次のようになつている。①概観（自然的歴史的概観）②市政の動き（区制、連合戸長制、町村制・大合併にいたるまでの経過・町村財政・主な事件）③人口と戸数（産業別内訳）④産業の発達（農・工・商・とくに家内工業の展開についてくわしい）⑤交通・⑥教育と社寺

各村ごとに必ず記してある事項のうち主要なものをあげれば

a、行政区画の変遷表（寛永一一年から現代までのもので、江戸時代の領主関係・明治初期の複雑な行政制度の転変が一目にわかるように整理されている）

b、合併以前の旧町村首長一覧表（氏名・出身字・職業・在任期間）

c、合併以前各町村戸数人口表

d、同米生産高表

e、農家階層変遷表（自小作地・所有及び耕作規模別農家階層構成表）

f、寺院・神社一覧表

g、学校変遷一覧表

以上であるがとくにeの農民階層構成に関する統計資料が大正初期から現在までにわたつて整理されている例は町村合併を契機として各地でさかんに編纂されている町村誌のなかにも例がすくなく、本書がそれを全県的規模で各町村別に行つていることは、商工業に関する詳細な記述とあわせて近代農業経済史の研究に貢献するところ極めて大きいと云える。

町村合併・地方事務所の廃止等の行政制度の改革によつて明治初年以来の地方行財政・経済資料の散逸のおそれが増大している今日滋賀県においてこのような試みが実を結んだことはまことに喜ばしく、他府県各町村おいても同様の体系的な町村史の企画がおこなわれる事を願つて紹介の筆をおく。（A5判一一四六頁　昭和三五年七月　滋賀県市町村沿革史編さん委員会刊　非売品）（有泉貞夫）

小野川秀美編
金史語彙集成　上

われわれ東洋学の一端にたずさわる者にとつて三十年前とかわりなく、今日でもなお同じ時間と労苦をくりかえしていることの一つは、漢文原典よりその必要な語句をもとめる場合の検索である。ただ一句を探すために、大部の漢籍を一枚々々と、くりひろげることの大儀さは、すでに同学の諸士が深く味わつておられることであろう。まして東洋学の基本的文献である十三経とか、あるいは二十四史とよばれる正史類などには、ほとんど毎日厄介になる。さいわい十三経については、中華書局から索引が出ていて、これでかなり楽にはなつたが、正史になるとすべてはそのようにいかない。かつて燕京大学より史記・漢書・後漢書などの索引が出て、その一部の労からはいささか解放されたが、二十四史全部には到底及んでいないのである。ところが今回思わぬ朗報がもたらされ、その一つが解決された。すなわちこの『金史語彙集成』（上）の刊行である。

本書は昭和のはじめ、東方文化学院京都研究所が開創されてまもなく着手された事業の一つである。聞くところによれば、当時狩野直喜博士や羽田亨博士らの唱導によつて、京大文学部や前記研究所において、新鋭の学者がそれぞれ史記・漢書・後漢書のいわゆる前三史、および遼史・金史・元史の後三史の索

引作成が開始されたという。なかでも金史は、はじめ山本守氏（現神戸外大教授）が太祖本紀一巻の語彙をとり、その後をうけて編者小野川秀美氏が、金史一三五巻にわたつて、人名・地名・官名その他必要な語彙をカードに集録し、これを康熙字典の順序にしたがつて、画数順に排列されたのである。当日わかかつた編者は、この事業に数年間没頭され、精魂をつくしてようやく完成された。ついで印刷に付すことになつたが、すでにその頃には今次大戦も苛烈となり、大阪の印刷所では仕事が遅々として進まず、ともかく三校をおえて校了寸前にまでこぎつけたところ、不幸にして昭和二十年の大阪空襲に印刷所が全く灰燼に帰し、折角の出版も烏有に化した。この時の編者の気持は如何ばかりか、察するに余りあるものである。しかし喜ばしいことには僅かに一枚ではあるが、最後の写真校正が編者の手許に残つた。またはじめのカードがそのまま京大文学部東洋史研究室の一隅に保存されていた。ただ戦後出版の困難な時代には、とてもこの索引が世に出ることなどは考えられなかつたのである。われわれも時々このカードをながめては、かつての編者の苦労を偲んだものであるが、たまたま昭和三十四年文部省からとくに研究成果刊行費の特別支出をうけて、再び印刷に着手し、編者及び多くの協力者の援助によつて、ここに多年の労作の第一冊が刊行されることになつたのである。

金史には種々の版本がある。いわゆる百衲本につかわれた景元刊本の外、南監本、北監本、殿版、江蘇書局本などあるが、本書の定本には、明の嘉靖八年刊行の南監本を定本としている。清朝の殿版以後の刊本には、後人の手が加わつているので、それをさけて南監本によられたことはまさに正しいことであるが、南監本はあまり一般に誰もが所有しているものとはいえず、本書もテキストに京大所蔵本及び陽明文庫所蔵本を利用されたときく。かえつて一般には百衲本が普及しているので、できれば百衲本によられた方が親切であつたと思う。しかし編者の着手当時はようやく百衲本が出版を開始したころで、金史索引には間に合わなかつたようであり、それもやむをえなかつたであろう。ただ巻葉についてかなりずれがあるようでその点かえすがえすも残念である。しかし南監本に欠文のある所は百衲本で補なつており、さらに必要に応じて百衲本と南監本との語句の相違を注記し、あるいは清の施国祁の金史詳校をひいて校勘していることなど、その配慮には頭のさがる思いがする。ただカッコで示された注に二・三種の様式のちがいがあるように見うけるが、どの様式が何をあらわすかをはじめに例言していただきたかつた。

金史はジュルチン族のたてた金朝の歴史で、遼史とともに元の至正年間に脱脱等を総裁官として編纂された。しかしその完成までにかなりの曲折をへたらしく、そのはじめの企画は、モンゴル軍が金の都汴京を陥した時に、張柔が国史・実録をもち出し、ついで王鶚が鶚・金二史の編纂のために史館をひらいたことにはじまる。しかして延祐・天暦の両時代にも編纂の計画をおこして実現せず、ようやく順帝の至正三年（一三四三）にいたつて、欧陽玄の努力により着手され、まもなく鶚史、ついで金史が完成したという。その間に百余年をへているが、本書もまた昭和のはじめに計画着手され、今日まで三十年を経過した。ともにはじまつた鶚史索引が昭和十一年に刊行されているのにくらべて、本書はさらに二十余年をへて、金史そのものの編纂

におとらぬ多くの苦難をたどつたが、ようやくまず上巻の刊行をみたことは、何より喜ばしいことである。ここに編者の労を多とするとともに、つづいて中巻、下巻の完成を期待するものである。

（B5判本文四八二頁昭和三五年五月京都大学人文科学研究所刊　非売品）（間野潜龍）

京都大学文学部博物館考古学資料目録

第一部　日本先史時代

本書は京都大学文学部博物館に収蔵されているすべての考古学資料を、ひろく内外の研究者に公開することを目的として刊行されたものである。ただし収蔵品の数が多いために、これを三部に分つて収録する方法がとられ、本書は第一部として、日本先史時代の遺物、すなわち弥生式時代とそれ以前の遺物を収めてある。日本の古墳時代以後の遺物や西洋・東亜各地の遺物は第二部・第三部として、ひきつづき刊行される予定である。

京都大学文学部博物館はその当初において「文学部陳列館」として設立された。そのご資料の増加にともなつて一九五五年十二月博物館法による指定をうけ、一九五九年には「文学部博物館」と改称されるにいたつたものである。その収蔵する考古学資料は日本全国の各時期にわたる資料、また西洋・東亜各地からの多くの将来品などを含み、その豊富さにおいてわが国有数のものである。さらにその考古学資料の著しい特色は、考古学研究室員が行つた学術的発掘調査によつて採集された一括遺物をはじめ、出土地の明確なものが多いことである。本来、文学部博物館の考古学資料は、序文に述べられているように、「大学における研究と講義のための標本として集められたものであつた。」しかし考古学資料は一部の研究者にだけではなく、ひろく内外の研究者に公開されることによつて、はじめて学問的資料としての価値を生ずるものである。このような観点から、過去においても、資料公開を目的として、一九二二年に「京都帝国大学文学部陳列館考古図録」、一九三五年にはその「続篇」、さらに一九五一年にはその「新輯」が刊行された。しかしながら、これら一連の図録は数多い資料の中から優品のみを選んで収録したものであつて、その目的とするところを十分果していない点があつた。これにたいし「われわれの研究室にはやくからあつた全収蔵品の目録を作つて出版しようという企画」が、研究室員のたゆまざる努力によつて、結実したのが本書である。

さて本書には前述したごとく日本先史時代の遺物が収められているのであるが、その配列は、まず遺跡単位でまとめて、そのなかで年代順に行っている。これが都道府県を単位とする行政区劃ごとにまとめられて、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州の順で配列されている。また同一遺跡の出土品は、土器・石器・骨角器・木器・装身具・土偶・金属器の順に配列するのを原則としている。そして本文記載の体裁は次のようになつている。

目録番号

写

真

目録番号

出土地名（旧地名または異称）

目録番号（品名　数量［登録番号］）

記　　述（材質・特徴・年代・出土状況その他）

大きさ

受入年　受入経路

文　　献